



目次

流刑地にて	1
-----------------	---

流刑地にて

「変わった機械なんですよ。」と、将校はその調査旅行者に言うと、ある意味、賛嘆の目差しで（といっても、それは彼には周知のものであったが、）その機械を見た。どうやらこの旅行者は、ある犯罪者の処刑に立ち会えという司令官の招待を、社交辞令だけで受けたらしかった（上官への不服従と名誉毀損で、この犯罪人は有罪判決を受けていた）。この処刑に対する興味は、この流刑地においてすら、さほど大きなものではなかった。深い掘り鉢状になり、砂混じりで、草木は疎らにしか生えておらず、斜面で丸く閉ざされたこの小さな窪地には、少なくともこの将校と旅行者を除いては、有罪人（ボサボサの髪と無精髭をした、呆けた感じの、大きな口をした男）と、ひとりの兵士しか居あわせていなかった（兵士の方はズッシリした鎖を手にもち、そこからは小さな鎖がジャラジャラと出て、有罪人はその小さな鎖で足首と手首、それから首にも枷を嵌められて、それらは連結用の鎖で繋がっていた）。ちなみに、この有罪人は犬のように余りにも従順に見えたので、鍵を外して自由に歩かせても、処刑の開始と同時に笛を吹けば、すぐに戻ってくるように思われた。

旅行者にとって、その機械は何の意味もなさなかった。ほとんどいかにも手もち無沙汰という感じで、彼は有罪人の背後をうろついていたが、一方の将校は、最後の準備に全く余念がなかった。彼は、地中深くに埋められた機械の下に這いつくばったり、機械の上半分を調べるため、梯子を登ったりしていた。本来なら整備士に委ねるような仕事でも、将校は大いなる情熱をもって取り組んだ。ひとつには、彼がこの機械の特別な信奉者だったからであり、ひとつには、それとは別の理由で、この仕事を誰にも任せられなかったからであった。「よし、これで完成！」と、最後に大きな声を出すと、彼は梯子から降りてきた。もうヘトヘトで、口を大きく開いて、荒い息をしながら、二枚の柔らかい女物のハンカチを制服のカラーの奥にグッと押し込んでいた。「しかし、その制服を熱帯で着るとするのは、かなり無理がありますよ。」と、将校が期待していたように、機械について質問をするのではなく、旅行者はそう言った。「おっしゃる通りです。」と、将校は言う、用意されたバケツの中でオイルやグリスで汚れた両手を洗った。「しかし、この制服が表わしているのは、わが故郷です。われわれは、故郷を捨てるつもりはありません。――まあ、とにかく機械をご覧ください。」と、すぐにそう続けると、両手を布で乾かしながら、同時に機械を差し示した。「ここまでは手作業がいましたが、ここから先は機械がやってくれます。」旅行者は頷くと、将校の後についていった。突発的な故障が起こることの言い訳をするために、彼は言った。「もちろん、故障はします。確かに今日は起こって欲しくないと思っていますが、とにかく覚悟は必要です。この機械は、本

当に十二時間、休みなく動き続けます。故障が起きても、本当に小さなものに過ぎませんから、すぐに修復されるでしょう。」

「座りませんか？」と、ようやく聞くと、籐椅子を積んだ山からひとつを引っ張り出して、旅行者に勧めた。彼はそれを断わらなかった。そこで穴の縁に腰を降ろすと、その奥の方にチラッと目をやった。それほど深い穴ではなかった。穴の一方の側には、掘り出した土が積まれて壁になっていて、もう一方の側には、例の機械があった。「司令官がもうこの機械について、」と、将校が言った。「説明したのかは分かりませんが。」旅行者は、ハッキリしない手の動きをした。将校は、特にそのことに関心を払うことはしなかった。なぜなら、ここから先は、自分で機械の説明ができるのである。「この機械はですね、」と、彼は言うと、クランク棒をパッと取って、それに寄りかかった。「前司令官の発明なのです。わたしは、最初の試作品からすぐに参加して、完成に至るまであらゆる仕事に携わりました。もちろん、この発明の功績は、全て彼だけに帰せられます。前司令官についてお聞きになったことは？　ない？　話すにしても、この流刑地そのものの設立が彼の仕事だという話を、今、声を大にして言うつもりはありません。われわれは、彼の友人でしたが、亡くなった時にはすでに、この流刑地の設立自体が余りにも筋が通った話になっていて、その後継者の頭に千の新企画があったとしても、少なくとも極めて長い期間、前の企画には一切、口が出せないということは分かっていました。予想は的中でした。新司令官は、そのことを思い知ることになったのです。あなたが、前司令官をご存じないというのが残念です！——とはいえ、」将校は話を中断した。「話が逸れました。目の前にあるのが彼の機械です。ご覧の通り、三つの部分からなっています。時を経るにつれて、これらのそれぞれの部分には、ある意味、民族的な名前がつけられました。下の部分は寝台、上の部分は製図屋、そして、この真ん中のブラブラした部分が、馬鋏です。」「馬鋏？」と、旅行者は聞いた。彼は、全く注意して聞いていなかった。ジリジリと強く、太陽がこの木陰のない窪地に絡みついていた。誰もが自分の考えをまとめ上げるのが難しくなっていた。それだけになお、この将校が驚嘆に値する人物だというのが、彼にはヒシヒシと伝わってきた（窮屈そうな、パレード用の、房つきの肩章を下げた、革紐で飾られた軍服に身を包み、極めて熱心に説明をしていた。おまけに、話をしながら、ドライバーを片手に、あちこちの螺をまだいじり回していた）。兵士も旅行者と同じ気もちのようであった。両方の手首に有罪人の鎖を巻いて、片手は銃に寄りかかりながら、首はガックリと前に落として、一切のことに関心を払おうとしなかった。そのことは、旅行者には奇異とは感じられなかった。なぜなら、将校はフランス語で話していたのに、兵士も有罪人もフランス語が理解できていないのは、明らかなことであっただけだから。それだけになお、それでもまだ、有罪人が将校の説明に食らいつこうとしているのが、とにかく奇異な感じがした。男は、一種の眠たげな辛抱強さで、将校がまさに指で差したところにいつまでも視線をやっていた。今、旅行者の質問で将校が話の中断を余儀なくされた時も、将校に倣い、旅行者の方にジッと視線を送っていた。

「ええ、馬鋏です。」と、将校が言った。「ピッタリの名前でしょう。針が馬鋏みたいに並んでいて、全体も馬鋏のように動くのです（一点だけで動きます。しかも、はるかに精密に）。ちなみに、それはあなたにもすぐにお分かりになります。こちらの寝台に有罪人が横になるのです。——つまり、わたしは、この機械についてまず説明して、次に

ようやく手順そのものを実行に移すのです。それによって、これについての理解はさらに深まるでしょう。実際のところ、製図屋の歯車のひとつはひどく摩耗しています。作動すると、キイキイと恐ろしい音を立てるのです。こうなると、もう会話は成立しません。残念ながら、ここでは交換部品が余りにも入手困難です。――ということで、さっきも申し上げましたが、こちらが寝台です。全体がすっかり脱脂綿の層で被われています。その目的は、いずれお分かりになるでしょう。この脱脂綿の上に、有罪人がうつ伏せになります（もちろん、全裸です）。男をしっかりと固定するため、ここに手、ここに足、ここに首の革紐が当てがわれます。こっちの寝台の頭の方の端（申し上げた通り、ここではまず顔を下にして、男は横たわります）には、こういう小さなフェルトの出っ張りがあります。それは、ちょうど男の口の中に入るように、簡単に調整がなされます。目的は、大声を出すことと舌を噛み切ることの防止です。むろん、フェルトは受け入れられます。そうでなければ、革紐で首をへし折られますから。」「こちらが脱脂綿？」と、旅行者は聞くと、前屈みになった。「ええ、そうです。」と、笑いながら、将校が言った。「直接、触ってみてください。」旅行者の手を取って、寝台の上まで導いてやった。「特別製の脱脂綿ですよ。だから、パッと見ただけでは分かりません。目的については、後でお話しします。」すでに少しばかり旅行者は、この機械に魅了されつつあった。日射しから守るために、目の上で手を翳しながら、彼は上方にあるその機械を仰ぎ見ていた。それは、大がかりな構築物であった。寝台と製図屋は、同じくらいの嵩があり、二棹の黒い長持のようであった。製図屋は、寝台の二メートルほど上方に位置していた。二つは、四本の真鍮製の柱によって、四つの箇所できつ結びあわされて、陽光の中、柱はほとんど光線を発さんばかりであった。二棹の長持の間には、馬鍬が鋼鉄製のベルトで吊り下がっていた。

さっきまで旅行者が無関心でいたことに、将校は全く気づいていなかった。しかし、今、生じつつある旅行者の関心には、鋭い感覚をもちあわせていた。何の邪魔立てもなく、観察の時間を旅行者に与えてやるため、彼は説明を一時中断した。有罪人は、旅行者の真似をしていた。目の上に手が翳せないの、自由になる目を上に向けながら、その目をパチクリさせていた。

「で、男が横になるんですね。」と、旅行者は言うと、肘かけ椅子に身を任せて、足を組んだ。

「ええ、」と、将校は言うと、縁なしの帽子を正しい位置にちょっと戻して、火照った顔の上に、手をやった。「では、お耳を拝借！ 寝台にも製図屋にも、それぞれ独自の蓄電池があります。寝台は自分用に、製図屋は馬鍬用に、それを使います。革紐できつく男を縛ったら、すぐに寝台のスイッチが入られます。精妙で、極めて素早い、横と縦の両方の揺れを伴いながら、それはブルブルと震えます。似たような機械は、精神病院でもご覧になったことがあるでしょう。ただし、この寝台の場合、全ての動きは精密に計算されています。つまり、馬鍬の動きとピッタリ同期しなければならないのです。そして、この馬鍬にこそ、判決の本来の実行が委ねられています。」

「判決は、どうやって言い渡されるのです？」と、旅行者が聞いた。「ご存知ないのですか？」と、驚いたように言うと、将校は唇を噛んだ。「ひょっとして、説明が分かりにくかったら、ごめんなさい。本当に許して下さい。というのも、この説明は、以前は司令官が行なうのが常だったのです。しかし、新司令官はこの名誉ある義務を放棄されまし

た。しかし、あの方がこういう高貴な来訪者の方に、「——そういう贅辞がされるのを、旅行者は両手で止めたが、将校は、あくまでもこの表現にこだわった——「こういう高貴な来訪者の方に、われわれの判決のやり方すら伝えていないというのは、これもまたひとつの改革なのでしょうが。それについては——、」と、恨みがましい言葉が口から出そうになるのを、グッと堪えながら、ただこう言った。「それについては、知らされておられませんので、わたしの罪ではありません。ちなみに、そうは言っても、ここでの判決のやり方を一番うまく説明できる人間は、わたしです。なぜなら、このところに、」——彼は、胸の内ポケットを叩いた——「本件についての前司令官のスケッチが入っているのですから。」

「司令官自身のスケッチ？」と、旅行者が聞いた。「じゃあ、彼は全ての役割を独占していたというのですか？　つまり、軍人でもあり、裁判官でもあり、設計士でもあり、化学者でもあり、製図屋でもあったというのですか？」

「その通りです。」と、コックリと頷きながら、強張った、熟慮するような目つきで、将校が言った。それから、吟味するように自分の両手の上にその視線を落とした。それは、スケッチに触ってもよいほど、十分に清潔ではないように、彼には感じられていた。それゆえ、バケツのところまで行くと、もう一度、彼はバシャバシャと両手を洗った。それから、小さな革製の書類挟みを取り出すと、こう言った。「われわれの判決は、厳格に言い渡されるものではありません。有罪人が踏み越えた法は、馬鍬で肉体に書き込まれるのです。例えば、この有罪人であれば、」——将校は男を指差した——「次のように書き込まれます。上官を敬うべし！」

旅行者はサッと男に目を走らせた。将校が男を指差した時、男は何か新しいことを聞き出すため、頭を下にして、あらゆる聴力を振り絞っているようであった。しかし、分厚く、固く結ばれた唇の動きからは、明らかに、男が何も理解できていないことしか読み取られなかった。旅行者は、色々なことを聞くつもりであったが、男がそういう様子だったので、こう言うだけにした。「あの男は自分の判決を知っていますか？」「いいえ。」と、将校は言って、さらに説明を続けようとしたが、旅行者はそれを遮った。「自分の判決を知らないですって？」「ええ。」と、将校は再びそう言ったが、旅行者がした質問のさらなる理由探しをしましょうかともいうように、それからちょっとの間、黙り込むと、その後で、こう言った。「教えても意味がありませんから。それどころか、この男はそのことを自分の肉体で思い知るのです。」旅行者は、有罪人が自分に視線を向けているのに気がついて、もう喋らないでおこうと考えた。男は、今、語られた経緯をあなたは見過ごすおつもりですかと、問いかけるようであった。それゆえ、肘かけ椅子にすでに身を委ねていた旅行者は、再び前屈みになりながら、それでもこう聞いた。「でも、そもそも有罪が宣告されているというのは、さすがに知っているんでしょう？」「いいえ。」と、将校は言う、まだ幾つかのおかしな打ち明け話が聞けるのが楽しみですとでもいうように、微笑んでみせた。「そうか、知らないんだ。」と、旅行者は言う、額にサッと手をやった。「すると、あの男は、今でもまだ、自分の弁明がどんな風に受け入れられたのかを知らないんですか？」「そもそも弁明の機会が与えられていません。」と、将校は言う、独り言でもいう感じで、自分にとっては当たり前のことを説明することで、旅行者にきまりの悪い思いをさせるのはよくないことだともいうように、顔を横に背けた。「弁明の

機会は与えられるべきでした。」と、旅行者は言うと、肘かけ椅子から立ち上がった。

将校は、機械の説明に時間を費やし過ぎる危険があるのを分かっていた。そのため、旅行者の方に歩み寄ると、腕を絡ませて、有罪人（その時、明らかに自分に注意が向いていたので、直立不動で立っていた）を手で差しながら――兵士の方も鎖を引っ張っていた――、こう言った。「現状は、こうなっています。わたしは、この流刑地の裁判官に任命されています。この若さです。なぜなら、実際、あらゆる刑事事件で前司令官を補佐してきましたし、機械のことを一番よく分かっているからです。わたしが決定を下す原則は、以下の通りです。そこに罪があるのは、常に疑いの余地がない。他の裁判所で、こんな原則に従っているところはありません。なぜなら、他の裁判所は多人数制ですし、さらにその上に沢山の上級裁判所がありますから。ここはそういう風にはなっていません。あるいは、少なくとも前司令官の時代には、そうではありませんでした。ただし、新司令官は、わたしの裁判所に介入しようとの意思をすでに示しています。しかし、これまでは、それはうまく受け流されてきましたし、今後もさらにうまくいくと、わたしは思っています。――あなたは、この事件について明らかにしようとお考えですね。どこにでもある単純な事件です。今朝、ある大尉から告発がありました。彼の従卒をやるように命じられて、部屋のドアの前で寝ていたこの男が、寝坊で遅刻をしたというのです。つまり、時鐘が鳴る度に直立して、大尉のドアの前で敬礼するという義務が、この男にはありました。それは、ちっとも難儀ではない、むしろ欠かすことができない義務でした。警護や勤務をするには、目覚めていなければなりませんから。昨晚、大尉は、従卒がその義務を果たしているのかを調べてみようと思ひ立ちました。二時が時を告げるのにあわせて、ドアを開けてみると、丸くなって眠りこけている従卒を、彼は見い出しました。彼は、おもむろに乗馬用の鞭を掴むと、男の顔に向けて振り下ろしました。男は、すぐ直立して許しを乞うどころか、主人の両足を掴んで、ユラユラと揺すりながら、大声でこう言いました。『鞭を放しなさい。さもないと、噛みつきますよ。』と――、こういう事情なのです。つい一時間前のことですが、大尉がわたしのところにやってきて、わたしは彼の申し出を書き取った後、すぐに判決文を書き下ろしました。それから、まずこの男を鎖で縛り上げたのです。どこから見ても、極めて単純な話です。まず男を召喚して、尋問していたとしても、混乱が生じたただけだったでしょう。男は嘘をついたかもしれないし、その嘘をわたしが見破ったとしても、新しい嘘がそこに置き換わったでしょう。そんなことが続いたはずですが、しかし、今ではわたしが男を捕縛しています。もう、男には何もさせません。――さあ、全ては明白ですか？　ところで、余り時間がありません。すぐにも処刑を始めたいのですが、まだ機械の説明が終わっていません。」と、旅行者を無理やり肘かけ椅子に座らせながら、また機械の方に歩いて行って、こう始めた。「ご覧の通り、馬鍬は人間の形をしています。こちらは上半身用の馬鍬、こちらは下半身用の馬鍬。頭部のためには、この小さな刃があるだけです。お分かりいただけます？」と、いつでもあらゆる範囲に及ぶ説明をしますという感じで、彼は親しげに旅行者の方に身を屈めた。

額に皺を寄せながら、馬鍬の方に旅行者は目をやった。訴訟手続きの説明には、満足がいかなかった。ともかく、ここが流刑地というのを頭に入れておくべきだし、ここでは特別の処置が必要になるから、最終的には軍隊的な処置すら取ることになるぞと、彼は

自分に言い聞かせた。しかし、それに加えて、確かに徐々にではあるが、明らかに新たな手続き（この将校の融通の利かない頭では、決して受け入れられない手続き）を採用しようとする新司令官への少なからぬ期待も感じ始めていた。このような思考過程を辿った上で、旅行者はこう聞いた。「司令官は処刑には立ち会うのですか？」「それがはっきりしないのです。」と、突然の質問で気まずい感じにさせられた将校が、親しげだった顔つきをサッと曇らせながら、言った。「まさにそのために急がねばならないのです。それどころか、非常に残念なことに、ここでの説明も省略せねばなりません。とはいえ、また機械の洗浄が終わる明日になれば――それくらいひどく汚れてしまうのが、この唯一の欠点です――、もっと詳しい説明をつけ足すことができるでしょう。今からは、まあ、必要なことだけを申し上げます。――この男が寝台に寝そべり、寝台がブルブル震え出すと、馬鋏が身体の上まで下りてきます。それは、沢山の針が身体につくつかないかの位置に来るように、自動的に調整されています。そこまでのことが完全に遂行されると、すぐにこの鋼鉄製のロープが一本の棒のようにピンと張られます。そして、今やゲームが始まります。事情通でなければ、この処刑における外見上の違いは見分けられないでしょう。この馬鋏は、単純に動いているようにしか見えないからです。震えながら、沢山の切っ先が身体の中に刺し込まれます（ちなみに、寝台によって身体もブルブルと震えさせられています）。そういうことで、誰でも判決の実行を確かめられるように、馬鋏はガラスで作られることになりました。そこへの針の固定については、幾つかの技術的な困難が伴いましたが、多くの試行錯誤の末、それは実現しました。とにかく、どんな苦労も厭うことはありません。そういうことで、どのように判決文が身体に刻まれるのかを、今では誰でもガラス越しに見られます。もっと近くまで来て、針をご覧になりませんか？」

旅行者はゆっくりと立ち上がり、そこまで歩いて行って、馬鋏の上に屈み込んだ。「ご覧いただいて分かるように、」と、将校が言った。「二種類の針が何重にも重なっています。全ての長い針の横には、短い針が並んでいます。つまり、長い針は判決文を刻み、短い針は、血を洗浄して、判決文をよりくっきりと浮かび上がらせるため、水を噴射するのです。それから先、血が混じった水は、この細い水路の中に送り込まれて、あの穴のところまで排水管が繋がっているこの主水路を、最後はスイスイと流れていきます。」と、将校は、血の混じった水が流れていくという経路を、指で差してみせた。彼はそのことをできるだけ目で見て分かるようにと、排水管の出口のところ、本当に両手で水を掬ってみせたが、旅行者の方は首をもち上げると、手を後ろに伸ばして探りを入れながら、肘かけ椅子の方に後退りをした。と、その時、驚くべきことに、彼のすぐ後ろのところ、近くから馬鋏の処置を見るようにという将校の誘いに、あの有罪人もまた乗ってきているのが分かった。鎖の先にいる眠そうな兵士を少し前に引っ張りながら、男は、自分でも例のガラスの上に屈み込んでいた。おずおずした目つきで、たった今、二人の紳士が何を観察していたかを探り出そうという風であったが、何の説明もなく、全く飲み込めずに終わった様子が、そこには見て取られた。あちらこちらで、男は屈み込んでいた。何度も何度も、隅から隅まで、ガラスを見て回っていた。男を元の場所に押し留めておくべきだと、旅行者は思っていた。なぜなら、男がやっていることは、おそらく規則違反だったのだから。ところが、一方の将校は、片手で旅行者をサッと制すると、

もう片方の手で、穴の横にできた壁から土を取って、兵士に向けてポイツと投げつけた。パッと目を上げて、有罪人がやっていることに気がついた兵士は、銃を脇に置いて、両足の踵を地面に食い込ませながら、すぐに足を取られるくらいグイッと有罪人を引っ張り、その後、身もだえしながら、有罪人が鎖をガチャガチャ鳴らしているのを、上の方から見ていた。「やつは立たせておけ！」と、将校が叫んだ。というのも、有罪人の所為で、旅行者の注意が、恐ろしく殺がれているのに気づいたからであった。それどころか、馬鍬など、どうでもいいという風に馬鍬越しに身を乗り出すと、旅行者は、ただ有罪人がどうなったのかを確かめようとした。「やつを大切に扱え！」と、将校がまた叫んだ。彼は、機械の外側を回って、有罪人を自分の手で両脇の下から掴まえると、兵士の力を借りながら、何度も足を滑らせる男を立たせようとした。

「今や、すっかり全体像が分かりました。」と、再び将校が自分の方を向いた時、旅行者はそう言った。「肝心のところが抜けていますよ。」と、将校は言う、旅行者の片腕を掴んで、上の方を差し示した。「あの製図屋の中に歯車が入っていて、それが馬鍬の動きを決めています。判決文を書いたスケッチに従って、この歯車は配列されるのです。わたしは、前司令官のスケッチをまだ使っています。これがそれです。」——彼は、革製の書類挟みから、何枚かの紙を引っ張り出してきた——「しかし、残念ながら、お渡しすることはできません。わたしのもち物の中でも、最重要のものですから。どうぞお座りになって。この距離でなら、それをお見せします。その方が、全体をしっかりとご覧いただけます。」最初の紙切れを旅行者は見せられた。何か気の利いたことを言おうと、彼は思っていた。しかし、そこで見せられたものは、迷路のように互いに幾重にも絡みあった線でしかなかった（それらは、余りにもびっしりと紙面を埋め尽くして、努めて見なければ、そこに余白があることすら分からなかった）。「読んで下さい。」と、将校が言った。「分かりません。」と、旅行者が言った。「だって、見れば分かるでしょう。」と、将校が言った。「大変、芸術的ではありますが。」と、ごまかしながら、旅行者が言った。「わたしには読めません。」「そうですか。」と、将校は言う、ニッコリと笑い、書類挟みをまた懐の奥にしまった。「学童の手本じゃありませんから。しっかり読めるまでには、相当な時間が必要です。最後には読めるようになりますよ。もちろん、簡単に読めるようではいけません。やつらはすぐには死にませんから。むしろ平均十二時間くらいで、ようやく死ぬのです。六時間が変わり目です。つまり、沢山の、本当に沢山の装飾が、本来の文字の周りを取り囲まなければならないのです。実際の文字は、身体の上をただの一本の細い帯になって取り囲んでいきます。残りの肉体は装飾用です。今ならもう、馬鍬やこの機械全体の働きをあなたも評価することができるでしょう？——とにかく、ご覧下さい！」と、梯子に乗って、はずみ車を回しながら、下に向かって叫んだ。「危ない、脇へ退けて！」そうして、全体が運動を開始した。はずみ車がキイキイ鳴かなければ、もっと堂々としたものになったのであろうが。将校は、このはずみ車の騒々しさに驚くと、拳でそれに脅しをかけて、それから、すみませんと言いながら、旅行者に対して両手を大きく広げてみせて、機械の具合を下から観察するため、急いで下りていった。彼にしか分からないことであったが、まだまだうまくいっていないらしい何かがあった。それから、またよじ登ると、製図屋の中にグイッと両手を突っ込み、今度は素早く下りるために梯子は使わず、柱のうち的一本を伝ってスルスルと滑り下りて、こ

の騒々しさの中でも自分の存在には気づいてもらいたいという一心で、力の限り、旅行者の耳に向かってこう叫んだ。「流れについては、お分かりいただけましたか？ 馬鍬が書き込みを開始しました。これが背中に最初の一笔を完成させると、馬鍬に新しいスペースを提供するため、脱脂綿の層が回転して、身体が横向きになるまで、男にゆっくりと寝返りを打たせるのです。そうするうち、傷によって書き込まれた部分が脱脂綿の上まで来て、この脱脂綿は特別の措置ですぐにそこからの出血を止めて、さらに文字を深彫りするための準備を行ないます。その後、ここにある馬鍬の縁のギザギザが、さらに肉体が回転するのにあわせて、傷口から脱脂綿を掻き取って、それをあの穴の中に投げ込んでいきます。そして、再び馬鍬は仕事に取りかかるのです。こんな感じで、十二時間ほどをかけて、どんどん深く書き進めます。最初の六時間くらいは、苦痛で顔を歪ませているだけで、ほとんどこれまでと同じように、有罪人はピンピンしています。二時間後にはフェルトが取り除かれます。なぜなら、もう叫ぶ気力がありませんから。この、頭の側にある電氣的に保温された鉢の中には温かい粥が入っていて、自分の舌で舐め取れるだけの粥は、好きな時に食べられます。このチャンスを無駄にする者はおりません。わたしには沢山の経験がありますが、そんな人は見たことがありません。六時間が過ぎると、ようやく食欲が失なわれます。そうすると、わたしはいつでもここで跪いて、その様子を観察するのです。男が、最後の一口まで飲み込もうとするのはまれなことです。口だけでクチャクチャと噛むと、それからあの穴にベッとそれを吐き出します。その時は、身体を屈めなければなりません。でないと、自分の顔に当たりますから。しかし、まあ、六時間が過ぎた頃になって、男がどれくらい静かになっているかといったら！ どんな阿呆の頭にも、理性が兆してきます。それは目から始まり、そこからだんだん先に広がります。自分でも馬鍬の下に横たわりたいと思ってしまう光景。ええ、そこから先は、何も起こりません。男が判決文を読み解こうとするだけです。まるで聞き耳を立てるかのように、男は口を尖らせます。ご覧いただいたように、判決文は、目で読み解くのも容易ではありません。それを自分の傷で読み解くのですから。とにかく大変な作業です。完成までには、六時間ほどを要します。それから、馬鍬がとどめを刺して、穴の中に投げ落とすと、死体は血の池と脱脂綿の上にピシャリと叩きつけられます。それで裁判は終わりです。われわれ（わたしと兵士）は、男を埋葬します。」

将校の話に耳を傾けて、両手は上着のポケットに突っ込みながら、旅行者はその機械の動作を見ていた。有罪人もそれを見ていたが、その意味を理解するまでには至らなかった。男はちょっと前屈みになり、ぶら下がった針を目で追っていたが、将校の合図で兵士がシャツとズボンの後ろからナイフで切りつけると、それは有罪人の身体からハラリと落ちていった。裸を隠そうとして、男は落ちていく衣服に手を伸ばしたが、兵士は男を高くもち上げて、最後のボロキレすらふるい落としてしまった。将校は機械を止めさせた。そして、今、生じたばかりの静寂の中、馬鍬の下に有罪人を横たわらせた。鎖は外されて、かわりに革紐が結わえつけられた。最初のうちは、有罪人はそのことをほとんど負荷の軽減のように受け止めていた。そして、今、馬鍬はもう少しだけ下に降ろされることになった。なぜなら、男が痩せていたのである。その尖端が触れると、男の皮膚の上をビクッと戦慄が走った。兵士が男の右手にかまけている間も、特に考えもなく、男は旅行者が立っている方に左手をグッと伸ばし、そういう旅行者を、将校は脇からジッ

と眺めていた。少なくとも、今、彼がサラリと説明してみせた今回の処刑が旅行者に及ぼす影響を、その顔色から読み取ろうとするかのようであった。

手首の関節を拘束する革紐がプツンと切れた。おそらく兵士が強く締め過ぎたのであろう。あなたは助けてくれるんでしょうと、千切れた革紐の切れ端を、兵士がヒラヒラと将校に示していた。将校も、やはり兵士の方に向かっていたが、顔は旅行者の方に向けながら、こう言った。「この機械は本当に寄せ集めです。あちらこちらで、切れたり、壊れたりしています。しかし、そういうことを理由に、判決全体の実行を躊躇する訳にもいきません。ちなみに、革紐については、応急の代替品が編み出されました。わたしは鎖を使っています。もっとも、それによって、右腕に対する震動の繊細さは損なわれるのですが。」鎖を装着している間も、まだ彼はこう言っていた。「機械を維持するための財源も、今は恐ろしく減らされています。前司令官の時は、この用途のためだけに、自由に使える予算がありました。ここにも倉庫があって、あらゆる補給品が保管されていたのです。白状すると、ほとんど浪費に近いこともやっていました（今、言っているのは、昔の話です。新司令官が言うように、今もそうだというものではありません。あの方は、古い慣行を打破する口実に、あらゆることを使おうとしています）。今やあの方は、この機械の予算を自らの管理の下に置きました。そして、わたしが新しい革紐をもらいたいと人をやると、証拠として切れた革紐を出せと言って、十日後にやっと新品が届くのですが、それほど品質もよくなく、大して使い物になりません。そして、その間、革紐なしでどうやって機械を動かすのかを気にかける人は、ひとりもいないのです。」

旅行者は思った。知らない関係の中に決定的に介入する際には、いつも由々しき問題が出来する。自分は、この流刑地の市民でも何でもない。この流刑地が属している国の市民でもない。もしこの処刑を糾弾、それどころか妨害するにしても、次のような答えが返ってくるだけかもしれない。あなたは外国人でしょう。黙っていて下さい。それには、何も返答できないかもしれない。それどころか、次のように言うだけになるかもしれない。わたしには、この事件そのものが分かっていません。なぜなら、物見遊山で旅をしているだけで、他国の裁判制度を変えようというわけではありませんから。さて、そうは言いながら、当地で見聞する物事は極めて魅力に富んだものであった。訴訟手続きの不正さ、処刑方法の非人道性は疑いようがなかった。旅行者の側に何らかの身勝手さがあるなどは、誰も思っていなかった。なぜなら、その有罪人と彼とは、顔見知りでも、同郷人でもなく、男に同情を誘うところもまるでなかったのだから。旅行者自身は、上級の役所の招待を受けて、当地では極めて丁寧なもてなしを受けていた。それどころか、この処刑に招待されているということは、この裁判所に対する何かの評価を求められているのかもしれない。今、はっきりと聞いたように、司令官がこの訴訟手続きの信奉者でも何でもなく、この将校にほとんど敵対的な態度を取っているという話からも、このことはさらにありそうなことだと感じられた。

その時、将校の怒りの叫び声を旅行者は聞いた。ちょうど、疲れも見せず、有罪人の口の中に将校がフェルトの出っ張りを押し込んでいた時のことであった。その有罪人が、抑え切れない吐き気に襲われて、ウツと目を閉じると、嘔吐をしたのである。将校は、慌ててフェルトの出っ張りから男を引き剥がすと、どうにか顔を穴の方に向けさせようとした。しかし、時はすでに遅く、汚物はもう機械を伝って、下まで垂れ落ちてしまっ

ていた。「全て、あの司令官の所為だ！」と、将校は叫ぶと、分別をなくして、前方の真鍮製の棒をグラグラと揺すった。「家畜小屋みたいに、機械が汚れてしまった。」そして、そこで何が起こったのかを、震える手で、旅行者に伝えたのであった。「わたしは、処刑の一日前から食事は一切禁止だというのを、何時間もかけて、あの将校に分からせることをしていませんでした。ところが、司令官の新しい柔軟な方針は、わたしのものとは全く違う考え方です。この男が拘留される前のことですが、司令官の取り巻きのご婦人たちが、男の首の周りにぎっしりと砂糖菓子を詰めてやっていました。こいつの全人生は、悪臭芬々たる魚介類で培われていたというのに、今では砂糖菓子を食べなければなりません！　だが、そんなことはどうでもいい。わたしには何も異論はありません。ただ、なぜ新しいフェルトが調達されないのでしょうか。三ヶ月も前から申し出ているのに。吐き気を催さずに、どうしてフェルトを口に入れられます？　死にゆく百人以上の人々が、しゃぶって、噛んできたフェルトですよ。」

有罪人は、頭を下に向けて、穏やかそうな様子であった。兵士は、有罪人のシャツで機械を磨くのに忙しそうであった。将校が旅行者のところにやってきた。旅行者は、何事かを予期して、一歩後ろに退ったが、将校は片手で旅行者を制すると、自分の脇にグイッと引き寄せた。「内緒でお話したいことがあるのです。」と、彼は言った。「よろしいですか？」「もちろんですよ。」と、旅行者は言うど、下を向いたまま、ジッと耳を傾けた。

「あなたが、今回、賛嘆する機会をもつことになったこの訴訟手続きや刑の執行に公式に賛同する者は、今や、この流刑地にはひとりもおりません。わたしこそが、その唯一の代弁者、同時に、前司令官の遺産の唯一の代弁者なのです。わたしには、この訴訟手続きをさらに拡充しようという考えは、もうありません。今、手元にあるものの維持に、全力を使うつもりです。前司令官の存命中には、この流刑地にもまだ信奉者たちが溢れていました。前司令官の説得力であれば、わたしにも一部、もちあわせがありますが、権力となると、わたしには全く欠けています。結果的に、信奉者たちは潜伏することになりました。まだ大勢、いるにはいるのですが、誰もそうだと告白することはありません。もし、今日（つまり、刑の執行日）、喫茶店まで出かけて、あちこち問いあわせて回っても、きっと曖昧な言葉しか返ってこないでしょう。それは静かな信奉者たちですが、今の司令官が支配して、彼の現行の見解がある中では、わたしの手駒にはなりません。ところで、わたしからも質問です。この司令官と、彼を悪の道に引き入れようとするご婦人たちの所為で、このような畢生の大作が、」――彼は、例の機械を指で差した――「滅んでしまってもよいのでしょうか？　そんなことが許されますか？　かりに数日間、外国人として、この島に逗留しているに過ぎないとしても？　とはいえ、もう一刻も無駄にはできません。わたしの裁判権に対抗する何かがすでに準備されています。司令部では、もう何度も協議がなされています（わたしは呼ばれていませんが）。それどころか、あなたの今日の訪問すら、この状況全体に特有なことであろうと、わたしは見ています。やつらは臆病なので、それであなたを寄越したのでしょうか（あなたは外国人ですから）。――もう少し前であれば、処刑がどのくらい違う形で進んでいたことか！　すでに刑の執行の一日前には、この窪地全体が人で溢れておりました。見物のためだけでやってくるのです。早朝になると、お供のご婦人たちを引き連れて、あの司令官が姿を現わします。ファンファーレが、この宿营地全体を目覚めさせます。わたしは、

全ての用意が整ったことを報告します。お歴々たちは、この機械の周りに整列していません——上級官吏の欠席は許されていません——。この藤椅子の山は、その時代のみすぼらしい残滓です。機械は、磨き上げられて、ピカピカに光っています。ほとんど処刑がある度、新しい補給品が入ってきます。何百人も見の前で——見物客は、ここから高台の方まで、全員がピッシリと爪先立ちになっています——、有罪人が、司令官自らの手で馬鍬の下に寝かされます。今日では、兵卒でもやってよいとされる仕事が、当時は、裁判長であるわたしの仕事でした。それは、わたしの誇りでもありました。さあ、処刑が始まります！ 妙な騒音で、機械の作業が妨げられることもありません。多くの人はもう見物すらしていません。それどころか、目をつむって、砂の中に横たわっています。今、正義がなされつつあるということは、皆が分かっています。静寂の中、聞こえてくるのは、フェルトで弱音化された有罪人の呻き声だけです。今日、この機械は、有罪人にフェルトが弱音化するより大きな呻き声を出させるまでには至っていません。しかし、当時は、今はもう使用禁止になった腐食用の液剤が筆記用の針から滴り落ちていました。さあ、六時間目です！ 近くから見たいという全員の望みは叶えられません。司令官は、自らの洞察に基づき、特に子どもたちには配慮するように命じます。確かに、職務上、わたしは、いつでもそこにいられる人間でした。よくそこで、二人の小さな子どもを両方の腕にぶら下げたものでした。責め苛まれた顔に喜びの表情が浮かぶのを、どのようにして、皆で見出したことでしょうか。ようやく成し遂げられて、すでに過ぎ去りつつあるこの正義の光によって、どのようにして、われわれの頬が照り輝いたのでしょうか！ 何という時代だったのでしょ、友よ！」自分の前に立っているのが誰なのかを、明らかに将校は忘れていた。旅行者を抱き締めると、その肩の上に、彼はチョコンと自分の頭を置いた。旅行者は、大いに困惑していた。イライラした感じで、彼は、将校越しに向こう側を見ていた。一方の兵士は、洗浄作業を終えて、今でもまだ飯盒から小さな鉢に米粥を注ごうとしていた。有罪人は、すっかり元気を取り戻したようであったが、そのことに気がつく、すぐに舌で米粥を舐め取ろうとし始めた。その有罪人を、兵士は、何度も押し返そうとしていた。なぜなら、その米粥は、もう少し後の時間のために用意されていたのである。しかし、いずれにせよ、兵士が、汚れた手を広げてそれに襲いかかり、飢えた有罪人の目の前でそれを食べるというのは、礼儀に即したことで全くなかった。

すぐに将校は気を取り直した。「動揺させる気はなかったのです。」と、彼は言った。「今、あの時代のことを分かってもらうことが無理だというのは、おっしゃる通りです。ちなみに、まだ機械は作業をこなしますし、自動でも動きます。この窪地にポツンと置かれても、自動的に作動するのです。そして、当時のように、何百人もの群衆が蠅のように穴の周りに集まらなくても、最後には、信じられないくらい軽やかに飛翔しながら、同じように死体は穴の中に落ちていきます。当時は、穴の周りに丈夫な柵をつける必要がありましたが、それはとっくの昔に取り壊されました。」

旅行者は、将校から顔を背けようと、あてもなく周辺に視線を漂わせていた。旅行者は、窪地の荒廃した様子を観察しているというのが、将校の考えであった。それゆえ、旅行者の両手を握ると、その視線を掴まえるため、少し身体の向きを変えながら、彼は聞いた。「この不名誉には、もうお気づきですか？」

しかし、旅行者からの返事はなかった。将校は、しばらくの間、彼のことを放っておい

た。大股を開き、両手は腰のところに当てて、静かに立ちながら、ジイッと地面に目をやっていた。それから、旅行者に対して励ますように微笑むと、こう言った。「昨日、司令官があなたを招待した時、わたしはあなたのすぐ横にいたのです。歓迎の言葉を、わたしは聞いていました。司令官は、知りあいでした。この招待で司令官が何を狙っているのかは、すぐに察しがつきました。彼には、わたしに干渉できるくらいの大きな権力があるのです。それでも、そういう方面には出ず、あなたという名声ある外国人の判断に、わたしを委ねようとしています。彼の計算は、念が入っています。あなたは、この島にやってきてまだ二日目です。前司令官のことや、あの方の考え方についてもご存知ではない。ヨーロッパ的な考え方にも執着があまりだ。おそらく根っからの一般的な死刑反対論者、とりわけ、この種の機械処刑の反対論者のひとりなのでしょう。おまけに、公衆の関心も引かず、すでに、多少、壊れ気味の機械の上で、みじめに処刑が進んでいるのもご覧になった——さあ、こういう全てのことから（と、あの司令官は考えています）、今や、わたしの訴訟手続きをあなたが正当と見なさないということが、それほどありえない話といえるでしょうか？　そして、もしあなたがこのことを正当だと見なさないのだとすると、このことをあなたは（わたしは、まだ司令官の考え方に沿って話をしていきますよ）、黙ってはいないでしょう。なぜなら、あなたはご自身の百戦錬磨の確信に、それでもまだ信頼を置いていらっしゃるから。もちろん、あなたは沢山の民族の色々な特性をご覧になり、それらの尊重ということも学んでこられた。だから、ひょっとしてあなたは、お国でやるように、全力で訴訟手続きに反対ということはされないかもしれない。しかし、あの司令官が求めているのは、そういうことでもないのです。ほんのちょっとした、本当に何気ない一言でもう十分なのです。うわべさえ彼の希望に沿っていけば、あなたの確信に従っている必要は全くありません。あらゆる手管を使って、彼があなたを質問攻めにするのは間違いのないでしょう。そして、取り巻きのご婦人たちも、車座になって、その話に耳を傾けるでしょう。あなたは、きっとこんなことを言うはずで、われわれの国では、裁判所の訴訟手続きが、少々、違っておりまして、判決の前には尋問がありますし、拷問があったのは中世の時代まででしたといった具合にです。これら全ての発言は、わたしの訴訟手続きを脅さない程度の無邪気な発言ですが、自明であると同時に正しくもあると、あなたの目には映っているでしょう。ところで、司令官はこれをどう受け止めるでしょう？　あの善良な司令官が、すぐさま椅子を脇に置き、バルコニーに向かって急ぐ様が目に浮かぶようです。取り巻きの婦人たちも、雪崩をうって彼の後を追いかけます。彼の叫び声すら聞こえるようです——婦人たちは、それを雷の声と呼んでいます——。そう、それはこんな感じの声です。わが国の津々浦々の裁判所の訴訟手続きを調査するように指示されたヨーロッパのある大学者が、古い習わしに従うわれわれの訴訟手続きを、非人間的とおっしゃった。そういう方が、このような判断をされた後、こういう訴訟手続きをそのままにしておくことは、もちろん、わたしにはできません。それゆえ、今日をもってわたしは命令する——と、まあ、そんな具合にです。あなたは介入しようとしていらっしゃる、彼が断じるようなことは口にせず、わたしの訴訟手続きを非人間的とおっしゃることもしていない。反対に、ご自身の深い洞察力と呼応するように、そのことは極めて人間的で、極めて人間らしいことだとお考えになり、この機械装置を賛美すらしていらっしゃる——しかし、それではもう手遅れな

のです。あなたはバルコニーに出ておられないが、そこはもう婦人たちで一杯です。あなたは、自分がここにいるということを感じさせようと、大声を出そうとしますが、その口は婦人たちの手で塞がれて——わたし自身と前司令官のこの作品は、消えてなくなるのです。」

旅行者は、笑いを押し殺さなければならなかった。そうすると、今までは極めて困難と思っていた課題が、実はひどく簡単だということになってくる。のらくらした感じで、彼は言った。「あなたはわたしの影響力を買い被っていらっしゃる。司令官はわたしの紹介状を読んでおられるので、こちらが裁判所の訴訟手続きの専門家ではないことは、先刻、ご承知です。わたしが何を言おうと、それは、一私人としての言葉なのです。そういうことで、なおさらわたしが任意で選ばれた他の誰かよりましなことを言えるはずありません。どちらにせよ、この流刑地で恐ろしく強大な権力をもっている（と、わたしは思っていますが）あの司令官よりはるかにつまらぬことしか、わたしは言えないのです。とはいえ、この訴訟手続きに対するあの方の意見が、あなたがお考えのようにきっぱりしているというのなら（そのことを、わたしは恐れています）、わたしのささやかな助けなど求めなくても、この訴訟手続きは終わりを迎えるでしょう。」

将校は、もう話を飲み込んでくれたであろうか？ いや、まだ飲み込んでくれてはいなかった。将校は、激しく首を振ると、有罪人と兵士の方をチラッと見て（二人は、ギクリとして、米粥から口が離れた）、旅行者の本当に真横までじり寄ると、顔ではない、上着のどこかに目をやりながら、前よりずっと低い声で、こう言った。「あなたは司令官のことがお分かりではない。あの方やわれわれ全てにとって、ある意味、あなたは——こういう言い方を許して下さい——害のない立場にいるのです。あなたの影響力は、いくら高く評価してもし過ぎではない（わたしの言うことを分かって下さい）。あなただけがこの処刑に立ち会われると聞いた時は、本当に天にも昇る心もちでした。司令官からのその命令は、わたしに対するものかもしれませんが、もしそうでも、自分に都合のよい方に転じてやろうと、わたしは思っています。あなたは、誤った唆しや蔑むような目つき——それは、処刑の大部分に立ち会う際には避けられません——には惑わされず、わたしの説明を聞き、この機械を見て、今、処刑をご覧になろうとしています。きっとあなたの判断はもう固まっているのでしょう。まだ少し不安があるかもしれませんが、処刑の光景を見さえすれば、それは消し飛んでいくのでしょうか。で、今、あなたにお願いがあります。司令官からわたしを守ってもらえませんか！」

旅行者は、話し続けようとする彼を押し止めた。「そんなこと、どうしたってできませんよ。」と、彼は叫んだ。「無理です。あなたには、不利益も与えられないかわり、利益も与えられません。」

「できますよ。」と、将校は言った。旅行者は、将校が両方の拳を丸めているのを、少しビクビクしながら、見ていた。「できます。」と、さらに語気を荒らげながら、将校は繰り返した。「一計があります。成功は間違いなしです。あなたは、ご自分には影響力がないと思っていらっしゃる。でも、あるのです（わたしには分かっています）。とはいえ、あなたの話にも正しさがあるのは認めるとして、こういう訴訟手続きを維持するためには、あらゆること（場合によっては、不十分なこと）を試すのが必要なのではないのでしょうか？ というので、わたしの計画をお聞き下さい。その実行のためには、今日、

この流刑地で、訴訟手続きについてのあなたの判断をできるだけ控えるのが何より必要になります。誰かからそのものズバリを聞かれぬ限り、何も口にしないでもらいたいのです。つまり、発言を短かく、ぼかすようにするのです。あなたにその話を振り向けるのは困難で、そのことであなたは不機嫌にもなっていて、何度かその話をしなければならなくなると、ほとんど悪態をつくことすらありえると、皆が信じるようにするのです。嘘をつけと言うわけではありません。全然、違います。そっけなく答えるとか、そういうことです。例えば、ええ、処刑は見させてもらいましたとか、はい、説明は全部、聞いていますとか。皆が、あなたの中に読み取るであろう不機嫌さには、実際、十分な理由があります（司令官が考える意味では、そこには不機嫌さはないということになるのでしょうか）。もちろん、司令官はそれを完全に誤解して、自分の意味で解釈すると思います。そのことを前提に、わたしの計画は組まれています。明日は、司令部で司令官の主宰による上級行政官全員の大きな会議があります。そういう会議のやり取りの中から見世物を引っ張り出すやり方を、もちろん、司令官は心得ています。そこには廊下が作られていて、いつも傍聴人たちで溢れ返っています。審議には、わたしも参加するように言われていますが、わたしは嫌悪感で身体がブルブルと震えています。さあ、いずれにしても、間違いなく、あなたはこの会議に招待されるでしょう。もし、今日、わたしの計画に従ってあなたが行動してくれるというなら、この招待は切なる要望に変わります。そして、何か理解できない理由でまだ招待が届いていないというなら、むしろ、あなたには招待を願い出してもらいます。そうすれば、招待は間違いなく受け入れられるでしょう。さあ、ということで、明日、あなたは、取り巻きの婦人たちと一緒に司令官の機敷席に座ります。司令官は、何度も上目づかいの視線を送ることで、あなたがそこにいるということを確認してくるでしょう。色々な、どうでもいい、下らない、傍聴人のためだけに用意したような話題の後――大抵は港湾整備の話です。万事が港湾整備！――、裁判所の訴訟手続きの件がもち出されます。もし司令官からその話が出ない、あるいは十分に早く出ない場合には、わたしの方で出すように取り計らいます。スクッと立ち上がり、今日の処刑の報告を行ないます。ごくごく簡単に、この報告の話だけを。こういう報告は、あそこでは、通例はやらないのですが、それでもわたしはやります。司令官は、いつものように親しげな微笑みを浮かべて、ありがとうございますと言うと、自分を抑え切れず、このチャンスに飛びつくでしょう。たった今（とか、そんなことを言うと思いますよ）、処刑の報告を受けました。わたしがこの報告につけ加えたいのは、まさにこの処刑に、あの大先生が立ち会われたというその点だけです。われわれの流刑地にとって、格別の名誉であるこの方の訪問については、もうあなた方も皆、ご承知でしょう。本日のわれわれの会議ですら、その方のご臨席により、その意義が高められています。さあ、その大先生にこんな質問を投げてみませんか？ この古い慣習やそれに先立つ訴訟手続きからして、あなたはこの処刑をどう評価されますか、というのがそれです。もちろん、万雷の拍手、全会一致の賛同です（わたしが、一番、手を叩いています）。司令官は、あなたの前で一礼すると、次のように言うでしょう。それでは、全員を代表して、わたしから質問をさせていただきます。すると、あなたは手摺りのところまで出てきます。両手は、皆の目の届くところに置いて下さい。でないと、婦人たちに掴まれて、指で弄ばれてしまいますから。――さて、そこでようやくあなたは口を開く。そこからの緊張の時間を

どうやってしのぐのか、わたしには見当もつきません。話をする時、あなたは自分を籠に嵌める必要はありません。真実を元に、がなり立てればよいのです。手摺りの上に身を乗り出して、がなり立てるのです。ええ、そうです、司令官に向かって、自分の意見を、揺るぎのない自分の意見を、がなり立てるのです。しかし、おそらくあなたは、そんなことをしようとは思えないでしょう。それは、あなたの性格に相応しくない。お国では、そういう場面では、多分、違った対応がされるのでしょうか。それはそれで正しいですし、完全に十分なことでもあります。立ち上がらなくていいのです。言うのは、二言三言して下さい。それでも、まだあなたの下にいる役人には聞こえるくらいの小さな声で囁くのです。それで十分です。処刑への不十分な参加者、キイキイと音を立てる歯車、切れかけた革紐、吐き気を催すフェルトについて、自分から話し出す必要はありません（ええ、ありませんとも）。他の全ては、わたしが引き受けます。信じてもらいたいのですが、わたしが話を振ることで、司令官は広間から追放はされないまでも、膝を突き、こう白状することを強いられるでしょう。前司令官、わたしはあなたの前にひれ伏しますと。――これがわたしの計画です。彼にそうさせる方向で、手伝っていただけませんか？　そして、もちろん、あなたはそうしたいと望んでいらっしゃるし、むしろ、そうすべきなのです。」そして、将校は、旅行者の両腕を掴まえると、苦しそうに息を吐きながら、彼の顔をジッと覗き込んだ。最後の言葉は悲鳴のようだったので、兵士や有罪人がハッと聞き耳を立てた。二人は、何も理解していなかったが、それでも食事の手は止めて、モグモグと咀嚼しながら、旅行者の方に視線を投げたのであった。

返すべき答えは、何より最初から旅行者には明らかであった。彼は、人生で余にも多くの経験を積んでおり、その場で動揺するなど、ありえないことであった。基本的に、彼は誠実であって、どんな恐怖も感じてはいなかった。それでも、今、兵士や有罪人を見た時、ほんの一瞬だけ、たじろぎはしたが、しかし、結局、言うべきことは言ったのであった。「無理です。」何度も目をシバシバさせながら、将校は、彼から視線を外すことはなかった。「その説明をしましょうか？」と、旅行者が聞いた。将校は、黙って頷いた。「わたしは、ここの訴訟手続きには反対なのです。」と、ようやく旅行者が言った。「あなたが秘密をうち明ける前から――もちろん、どんな状況でも、この信頼を悪用するようなことはしませんよ――、この訴訟手続きへの介入が正しいことなのか、この介入がほんの少しの成功の見込みしか生み出さないのかを、すでに考えていました。そういう場合、まず誰に相談すべきかは明らかです（もちろん、司令官にです）。あなたの言葉で、そのことはより明らかになりました。そして、そのことでようやく決心がついたというよりは、むしろ反対に、あなたの誠実な確信は、わたしを惑わせるには至りませんでした。深く悲しませたのです。」

将校は黙って立っていたが、機械の方に向きを変えて、真鍮製の棒の一本を取ると、少し身体を後ろに反らせて、あたかも全てが滞りなく進んでいるのかを見定めるように、製図屋の方をグッと見た。兵士と有罪人は、お互いが友人になったようであった。有罪人は、きつく縛られた中でそれをやるのは大変であったが、兵士に対して合図を送った。兵士は有罪人に一礼した。有罪人は兵士に向かって何かを囁きかけて、それに対して、兵士は頷き返した。将校の後に追いつぐと、旅行者は言った。「わたしが何をするつもりか、まだあなたをご存知ではない。訴訟手続きについての考えを司令官にぶつけるとい

うのがわたしの考えです（ただし、会議の場ではなく、一対一です）。何かの会議に招待されるほど、ここに長逗留するつもりはありません。明日の朝にはもうここを発つか、少なくとも船に乗り込んでいることでしょう。」

将校は、何も聞いていない感じであった。「つまり、この訴訟手続きに、納得していらっしゃるなかったんですね。」と、独り言をいうと、老人が子どものいたずらを笑いながら、その裏で自分の本当の熟考を隠しているような感じで、笑った。

「さあ、もう時間だ。」と、最後にそう言うと、何かの要求、何かの参加への呼び出しを含むような明るい眼差しで、彼は旅行者をジッと見やった。「何の時間？」と、不安そうに旅行者は聞いたが、何の返事もなかった。

「もうお前は自由だ。」と、将校は有罪人にその国の言葉で告げた。最初、その言葉を男が信じることはなかった。「だから、自由なんだよ。」と、将校は言った。有罪人の顔は、初めて本来の生氣を取り戻した。本当に？ たまたま口から出た将校の気紛れに過ぎないのでは？ 外国の旅行者がお情けを恵んでくれたのか？ 何が起こったのか？

男の顔は、そう尋ねるようであった。しかし、それも長い間ではなかった。何であれ、許しを受けられるのなら、実際、自由になりたかった。さて、馬鍬が壊れない程度に、男は身体を揺すり始めた。

「革紐が切れてしまうぞ。」と、将校が叫んだ。「大人しくしている！　すぐにほどこいてやるから。」それから、合図を送った兵士と一緒に、仕事に取りかかった。一言も発せず、有罪人は独りで静かに笑っていた。ある時は左側の将校、ある時は右側の兵士に顔を向けながら、旅行者に目をやるのも忘れていなかった。

「そいつを引っ張り出せ。」と、将校が兵士に命じた。馬鍬があるため、そうするには、少し慎重にやらなければならなかった。こらえ症のなさから、すでに有罪人は、背中に幾つかの擦過傷をこしらえていた。

そして、この頃から、ほとんどそれ以上、将校は男に構うのを止めた。将校は、旅行者ののところまでやってくると、再びあの小さな革製の書類挟みを引っ張り出して、パラパラとめくり、ついに探していた紙切れを見つけ出すと、旅行者に示した。「読んで下さい。」と、彼は言った。「読めません。」と、旅行者が言った。「すでに申し上げた通りです。この紙切れに何が書いてあるのか、わたしにはさっぱり分かりません。」「もっとしっかりと見て下さい。」と、将校は言って、一緒に読んでやろうと、旅行者の側までやってきた。それが何の助けにもならなかったので、恐ろしく遠いところにある小指で、何があっても、その紙には触れてはならないという風に、紙の上方を辿りながら、この方法で、旅行者の読解の手助けをしようとした。少なくとも、旅行者は、そのことで将校の気に入れようとの一心で、必死に頑張ろうとした。しかし、できないものはできなかった。すると、将校は、銘文の綴りを一文字ずつ区切って読み始めて、それからもう一度、全文を一気に読み上げた。「正しくあれ！——と、書いてあるのです。」と、彼は言った。「これなら、さすがにあなたでも読めるでしょう。」旅行者が余りにも深く紙の上に屈み込むので、触られてしまう恐れから、将校は、それをさらに遠ざけようとした。今はもう、旅行者は何も言わなかったが、今でもまだそれが読めなかったのは、明らかであった。「正しくあれ！——と、書いてあるのです。」と、もう一度、将校が言った。「そうなんでしょうね。」と、旅行者が言った。「そう書いてあるんだと思います。」「まあ、それな

らいいです。」と、少なくとも部分的には満足を感じながら、将校はそう言い、紙切れを手にしたまま、梯子を登った。それから、大いに用心しながら、製図屋の中にその紙切れを置いて、どうやら歯車装置を完全に並び替えたようであった。それは極めて骨の折れる作業で、本当に小さな歯車が問題になっていたのに違いなかった。将校の頭は、時々、製図屋の中に完全に消えてなくなった。本当に正確に歯車のことを調べなければならなかったのである。

旅行者は下からずっとこの作業を目で追っていた。首が凝っていた。燦々と光を注ぐ空全体のために、両目がチリチリと痛くなっていた。兵士と有罪人は、二人で作業に没頭していた。すでに穴の中にあった有罪人のシャツとズボンは、兵士の銃剣の切っ先を使って、引っ張り上げられていた。恐ろしいほどそのシャツは汚れていた。有罪人はバケツの中でそれを洗い、それから、そのシャツとズボンを身につけた。兵士も有罪人も大声で笑うしかなかった。なぜなら、衣類の背中側が真っ二つに裂けていたのである。有罪人は、自分には兵士を楽しませる義務があると思ったようであった。切れた服のまま、男は兵士の目の前でクルリと一回転してみせた。胡座をかいていた兵士は、膝をうって笑った。それでもまだ、その紳士がいるのを考慮して、二人は出しゃばり過ぎないようにしていた。

上で作業を終えるとすぐ、微笑みながら、もう一度、将校は全ての部品にザッと目をやった。今度は、それまで開いていた製図屋の蓋をパタンと閉めて、下に降りると、穴の中を覗き込んで、それから有罪人の方を見て、男が自分の服を取り出すのを満足そうに眺めていた。そして、手を洗うためにバケツのところまで行ったが、不快な汚れが手遅れの状態にあるのに、彼は気づいた。今は手が洗えないのを残念がると、最後は砂の中に両手を突っ込んで――この代替策は全く不本意だったが、甘んじてやるしかなかった――、そこから立ち上がり、制服の上着のボタンを外し始めた。その時、襟の後ろに無理に押し込んでいた二枚の婦人用ハンカチが、まず彼の手の平にハラリと落ちた。「さあ、ここにお前のハンカチがある。」と、彼は言うのと、それを有罪人の方に投げつけた。それから、旅行者に向かって説明をしながら、彼は言った。「ご婦人たちからの差し入れの品です。」

彼は明らかに慌てており、そういう感じで制服の上着をパッと脱ぐと、それから全裸になったが、それでもその服のことは恐ろしく大切に取扱った。それどころか、軍服についた銀色の飾り紐をわざわざ指で撫で上げては、房飾りをパッパと振り、正しい形に整えてやった。ただ、他方で、ひとつの衣類の手当てを終えるとすぐ、不機嫌そうにそれを例の穴にポイッと投げ込んだというのは、ほとんどこの几帳面さに似つかわしくなかった。手元に残った最後のもの、それは吊り紐のついた短剣であった。彼は、鞘から剣を抜いて、それをへし折ると、短剣、鞘、吊り紐の全部をグッと掴んで、恐ろしい勢いで投げつけたので、穴の底では、それらがぶつかりあって、ガチャガチャという音がした。

今や、そこに全裸で彼は立っていた。旅行者は唇を噛みながら、一言も口にする事はなかった。これから何が起きるかは分かっていたが、将校が何をするにしても、それを止める権利は彼にはなかった。そして、将校がしがみついている裁判所の訴訟手続きが、本当に今にも改められようとしている――ひょっとして、旅行者の介入によって（介入の義務があると、彼は感じていた）そうになっているかもしれない――のであれば、

今の将校の振る舞いは完全に正しいものであった。旅行者が将校の立場にあったとしても、それ以外の振る舞いはできなかったであろう。

兵士と有罪人は、最初、何も分かっていなかった。初めのうち、彼らはそちらを見ることもしなかった。有罪人はハンカチを取り戻したのを大いに喜んでいたが、いつまでもそうして喜んでいては駄目だった。というのも、思いも寄らぬ、素早い動作で、兵士がそれを掴み取ったのである。さて、今度は、有罪人が兵士のベルトの奥からハンカチを引っ張り出す番であった（兵士はベルトの奥にそれを押し込んでいた）。しかし、その辺は、兵士の方にも抜かりはなかった。二人は、そうやって半分ふざけた感じで、喧嘩をしていた。将校が、完全に衣服を脱いだところで、二人はようやくハッとわれに返った。とりわけ有罪人が、何か大きな変化が生じたという予感に襲われたようであった。自分の身に起こってきたことが、今や、将校の身に起こっていた。おそらくそれは、究極のところまで行くのであろう。きっとあの外国人の旅行者がそういう命令を下したのだ。つまり、これは復讐だ。最後まで苦しむのは自分ではない。やつの方が最後まで報いを受けるのだ。今や、声にならぬニンマリ笑いが顔中に広がり、もう消えることがなかった。

そうして、将校は機械の方に向かった。ずっと前から、将校がこの機械に習熟しているのは分かっていたが、それでも、今、彼がそれに取り組みながら、やすやすと操作する様子は、ほとんど舌を巻くばかりであった。手を馬鋏に近づけただけで、それは何度も上下しつつ、彼を受け入れるためのあるべき位置にスッと収まった。寝台の縁を彼が掴むだけで、もうそれはブルブルと震動を始めた。フェルトの出っ張りが口の前まで来ると、彼がどれほどそれを望んでいないのかを、人々は感じ取った。しかし、躊躇は一瞬であった。すぐに肚を決めると、彼はそれをパクリと口に含んだ。準備は完了した。ただ、あの革紐だけはまだ元のところにぶら下がっていたが、どうやらそれは用済みのようであった。将校を縛りつけておく必要は、全くなかったのである。その時、緩んだ革紐のところには有罪人の注意が向かった。革紐できつく締めていなければ、処刑は完成しないというのが、この男の考えであった。男は、熱心に兵士の方に目配せをした。二人は、将校を縛り上げるため、そこに向かって駆け出した。一方の将校は、製図屋の起動スイッチであるクランクを押し倒すため、すでに片足を伸ばしていた。集まってくる二人に、彼はそこで気がついた。それゆえ、その片足の方は引っ込めて、縛られるがままになってやった。もっとも、今度はクランクの方に足が伸ばせなくなってしまった。おそらく、兵士も有罪人も、そのクランクを見い出すことはないであろう。旅行者は、自分が手を出すのは止めておこうと決心していた。ところが、そんな必要すらないのであった。というのも、革紐を装着するやいなや、もう機械は稼働を開始したのであるから。寝台は震えて、針は皮膚の上を踊って、馬鋏はあちらこちらを漂っていた。旅行者は、すでにしばらくジッと一点を見つめていたが、機械の中の歯車がキイキイ軋み出すという話を、フッと思い出していた。しかし、全ては静寂の中にあっただけだった。ブーンという物音すらしなかった。

このように静かに作業が進んだために、この機械は、文字通り、注意を集めなくなっていた。旅行者は、兵士と有罪人の方をボウッと見ていた。一番元気だったのは、有罪人であった。機械に関するあらゆることが、有罪人の興味を引いて、ある時はしゃがみ、

ある時は背伸びをして、絶えず人差し指をピンと伸ばしては、兵士に何かを示そうとしていた。そのことが旅行者を堪えられない思いにした。ここに最後までいるというのは、彼の決意であった。しかし、二人をずっと正視しているのは、堪えられないことであった。「家に帰りなさい。」と、彼は言った。おそらく兵士には、そのような用意があるようであった。しかし、有罪人は、その命令をまさに刑罰のように受け取っていた。すぐるように両手をあわせながら、ここにいさせて下さいと、男は言った。首を横に振りながら、旅行者がその訴えを撥ねつけると、男は、跪くということすらやってきた。旅行者は、ここでは命令の効力がないと見て取ると、近くまで行って、二人を追い払おうとした。すると、上の製図屋のところで何かの物音がした。チラッとそちらに目がいった。やはり歯車がよくないのか？　しかし、そういうことでもなかった。製図屋の蓋がゆっくりもち上がると、やがてそれはパタンと開いた。ひとつの歯車のギザギザの部分が姿を現わして、せり上がると、すぐにその歯車全体が剥き出しになった。まるで何かの巨大な力で製図屋が捻り潰されて、そのため、この歯車のための空間がもう残されていないようであった。歯車は、製図屋の端のところまで転がると、そこからストンと落ちて、まだしばらくは倒れずに砂の上を転がった後で、パタンと倒れた。ところが、上からはさらにひとつ、別の歯車がせり上がってきていた。無数の、大きな歯車、小さくて見分けもつかない歯車群がそれに続いた。そのどれもが同じようになった。つまり、さあもう製図屋の中は空になったぞといつも思わせるのに、その度、また新しい、とりわけ多くの歯車群からなる塊が現われ出ると、またズドンと落ちて、砂の上を転がった後で、パタンパタンと倒れたのである。このような出来事にうっとりさせられて、旅行者の命令のことなど、有罪人の頭からはすっかり消えて去っていた。歯車群は有罪人の心を完全に驚掴みにしていた。男は、常に新しい歯車を手に入れたいと思ったが、同時に、自分を助けて欲しいと兵士にせつついたり、驚いて手を引っ込めたりしていた。なぜなら、次から次に歯車は現われたが、それらは、少なくとも最初の転がり出しの際には、いつも彼をギョッとさせたのである。

一方の旅行者の気もちも、ひどく落ち着かなくなっていた。機械は、明らかに崩壊に向かっていった。それが静かに進行していると思っていたのは、見当違いであった。旅行者は、これからは将校の面倒も見なければという気もちになっていた。というのも、もう将校は、自分では面倒を見られない状態になっていたのである。ところで、歯車が落下することに全神経が集中している間に、機械の他の部分への監視がおろそかになってしまっていた。今、製図屋が最後の歯車を吐き出した後で、それでも彼が馬鋏の上に屈み込んでみると、新たなさらにひどい驚きに襲われることになった。馬鋏はもう書き込んでなどいなかった。ただズブリと突いているだけであった。寝台は踊ってなどいなかった。ただ震えながら、針山に向けて彼をもち上げようとしているだけであった。旅行者は、何とか手を出そう、できれば全体を止めてしまおうと考えた。こんなものは、将校が到達を目論んでいた拷問でも何でもない、ただの直接的な殺人であった。彼は、グッと両手を伸ばした。だが、そこではすでに、いつもなら十二時間後に初めてそうなる形で、刺し貫かれた身体をくっつけて、馬鋏がせり上がってきていた。血は、水でも薄められず、百筋の奔流を作りながら、流れ落ちていた。今度ばかりは、あの樋も役立たずであった。そして、あの最終的な機能も、今はすっかり役立たずであった。肉体は、針山

から外れず、血をドクドクと溢れ出させながら、落下もせず、穴の上で宙吊りにさせられていた。馬鍬は、元の位置に戻ろうとしていたが、まだ重荷を下ろしていないのに気がついたとでもいうように、それでも穴の上に止まろうとしていた。「ちょっと手伝って！」と、兵士と有罪人に向かって、旅行者は叫ぶと、自分でも将校の両足にパッと掴まった。そこで、両足に身体ごと抱きつこうと、彼は思っていた。例の二人には、別の方から将校の頭に抱きつかせればそれでよい。そうすれば、針山からゆっくりと引き剥がせるであろう。しかし、今や、二人はやってくる決心がなかなかつかずにいた。有罪人は、すっかり背中を向けてしまっていた。旅行者は、二人のところまで飛んでいって、将校の頭の前まで力づくで押していった。そして、ほとんど本意とはいえない形で、そこで死者と対面することになった。まだ生きているような顔。約束されていた救済の兆しなど、一切、そこにはなかった。他の全員が機械の中に見出したものを、将校はそこに見い出さなかった。唇は硬く結ばれて、両目は見開かれていた。そこには、生前の印象が浮かんでいた。まなざしは穏やかで、確信に満ちていた。一本の太い鉄製の刺の先端が、その額を刺し貫いていたが。

兵士と有罪人を後ろに従えながら、旅行者が、当てずっぽうで流刑地のとある住宅地に辿りついた時、そのうちのひとつの家を兵士が指で差して、言った。「これがその喫茶店です。」

ある家の一階に、奥行はあるが、天井高はない、壁と天井が煤だらけの、洞窟のような部屋があった。その間口は、全て道に向かって開かれていた。この喫茶店は、流刑地にある他の家々（司令官の宮殿風の建築も含めて、全てがひどく荒廃していたが）と、ほとんど見分けがつかなかったが、それでも、ある種の歴史的建造物という印象を旅行者の胸に抱かせた。過ぎ去った日々の権勢を、彼は感じた。同伴者たちにつき添われながら、近くまで行って、喫茶店の前の道の上に置かれた空のテーブルの間を通り抜けると、彼は、部屋の中から漂う、冷たく、カビ臭い空気をグッと吸い込んだ。「あの前司令官は、ここに埋葬されています。」と、兵士が言った。「墓地にある敷地は、牧師から駄目と言われたのです。しばらく埋葬地は決まりませんでした。結局、ここに埋められることになりました。この辺の事情については、むしろ、将校からは、何の説明もなかったでしょう。なぜなら、当然、そのことを最大の恥辱とっていましたから。それどころか、何度か、前司令官を夜に掘り返そうとしたくらいなのです。とはいえ、毎回、追い払われていたが。」「その墓はどこに？」と、兵士の言葉が信じられなかった旅行者は、そう聞いた。すぐに彼のところに兵士と有罪人が駆け寄ってきて、グッと伸ばした二つの手で、墓石が置いてある方を差し示した。何脚かの椅子に数人の客が座っている後方の壁の側のところまで、二人はグイグイと旅行者を引っ張っていった。おそらく、それは港湾労働者たち（黒いキラキラと光る短い髭を顔一面に生やした屈強な男たち）だったのであろう。全員が上着を身につけず、ズボンも擦り切れていた。貧しい、うちひしがれた人々。旅行者が近寄ると、何人かは腰を上げて、壁に身体を押しつけながら、彼が来るのを待っていた。「あいつは余所者だぞ。」と、旅行者の周りで囁き声がした。「あいつの墓を見るつもりなんだ。」テーブルのひとつを彼らが退けると、その下に本当に墓石があった。飾り気のない石で、テーブルの下に隠しておけるくらいの高さしかなかった。そこには小さな活字で碑文が書いてあった。読み取るためには、跪かなければなら

なかった。そこにはこう書かれていた。ここに前司令官が眠る。今は名前を明かせぬ信奉者らが、ここに墓穴を掘り、墓石をうち立てた。巷では、ある一定期間の後、この司令官が復活して、流刑地を奪還すべく、この家から信奉者たちに号令を発するという予言がある。信じて、身を潜めよ！ 全てを読み終わって、スッと立ち上がると、自分を取り囲むようにして、男たちも腰を上げて、笑っているのに気がついた。男たちは、旅行者と一緒に碑文を読んで、そこに滑稽なところがあるので、お前も俺たちの考えにあわせると、旅行者に要求するかのようであった。旅行者は、そのことには気づかないように振る舞った。何枚かの硬貨を男たちに与えると、テーブルが墓の上に据え直されるまで、もうしばらく待って、喫茶店に別れを告げて、港の方に向かった。

兵士と有罪人はその喫茶店に知った顔があって、その知りあいが、二人を引き留めようとしていた。しかし、すぐに身をもぎ離したに違いなかった。なぜなら、旅行者が渡し舟に繋がる長い栈橋の真ん中まで、ようやくやってきた時、二人はもう彼の後を追いすがってきたのである。おそらく、ギリギリの最後まで一緒に連れていってくれるよう、旅行者を拝み倒そうというのであろう。栈橋の下で、汽船への渡しについて旅行者が船頭と交渉をしていると、二人は黙って栈橋を駆け下りてきた。なぜなら、敢えて騒ぎ立てようとは思わなかったのである。だが、二人が下に降りてみると、旅行者はもう渡し舟の上の人になっていた。今、まさに、渡し舟のもやい綱を船頭が緩めるところであった。二人はまだ、渡し舟に飛び移れたかもしれなかった。しかし、旅行者は、ゴツゴツと結び目のついた重たい太綱を甲板からもち上げながら、それで二人に脅しをかけて、こちらに飛び移られるのを防いだのであった。

流刑地にて フランツ・カフカ

翻 訳 bambus

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
